

## 重いものは軽そうに、軽いものは重そうに

お茶の水女子大学2年（東京都）

得永 華和

「重いものは軽そうに、軽いものは重そうに」。私たちがお稽古で水指や茶杓を持つ時、先生はよくこうおっしゃる。なんとも逆説的な言葉だが、きっと、そうすることでよどみのない落ち着いたお点前ができるのだろう。しかし、この言葉は実は、物理的なお点前の所作にとっただけではなく、茶道をする上での精神にとっても重要なことを示しているのではないかと最近思い始めた。

大学2年生になり、この春から私は茶道部の部長を務めている。私はリーダーの仕事には慣れているし、何より私は茶道が好きだ。だから、部長を務めることに迷いやためらいはなく、むしろ自信があった。

4月、たくさんの1年生が入部し、部員数はなんと2倍になった。お稽古が急に賑やかになって嬉しい反面、苦勞することが多かった。1年生の多くが茶道の初心者で、私たちは彼女たちに茶道を一から教えなければいけなかった。限られた時間、道具、場所の中で工夫して、たくさんの1年生がきちんとお稽古できるようにすることにはとても神経を遣った。また、私は部長として、部の手続きの事務作業にも追われていた。とにかく慌ただしく日々が過ぎていった。

6月、私たちは数年ぶりに外部の茶室をお借りして茶会を開くことになった。お道具やお茶、お菓子の準備。会場への荷物の搬入。当日の役割分担。やることは驚くほどたくさんあった。茶会係の2年生を中心に準備を進めたが、私は彼女たちに気を遣い過ぎて伝えたいことをうまく伝えられず、思うように準備を進められなかった。ぎこちないやり取りを繰り返しながら、私たちはなんとか茶会を終えた。

このときには私は疲れ果てていた。私はもどかしかった。円滑に1年生にお稽古をさせてあげることがなかなかできなかつたし、茶会の時にはうまく部員と力を合わせることができなかつた。茶道が好きで、リーダーを務める自信もあって部長になった私であったが、その時には、お稽古に行くことを億劫にすら感じるようになっていた。

こんなとき、ふと思い出したのが例の「重いものは軽そうに、軽いものは重そうに」である。私はずっと、この言葉はあくまで茶道の動作のことを言っているのだと思っていた。しかし、実際にはこの言葉は、もっと精神的なことにも言及しているのではないか。この言葉は、「大変なことは軽やかに、簡単なことでも慎重に行うように」というメッセージなのではないか。私はそう思うようになった。

気がついたら私は、「重いものは重そうに」振る舞っていた。たくさんの部員に気を配りながらお稽古を行うのがつらくて、そうした気持ちが態度にも出ていたように思う。また、部長になってすぐの私は、恥ずかしいことに「軽いものは軽そうに」振る舞い過ぎていたのかもしれない。私は部長を務めることに自信があった。だから、「うまくいかない」現実とのギャップに突き落とされたのだ。私はもう少し謙虚に、慎重に部長になるべきだったのだ。私は深く反省

した。

「重いものは軽そうに、軽いものは重そうに」の言葉を発する際、先生は現実には私たちのお点前の動作について言及されていたのだろう。一方で私が気がついたのは、この言葉はもっと思想的な言葉だ、ということだ。改めて、茶道は奥深い。茶道とは一見すると、お茶やお菓子、お道具などの、「もの」の即物的な世界に思える。しかし、どうやらその奥には、「こころ」の哲学的な広い世界が広がっている。このことに気がついた今、私は茶道を以前よりもずっと楽しんでいる。私が行うお点前は、ある一連の動作ではあるが、本当はもっと広く深い世界と繋がっている。そんな気がしているのだ。

これからも私は、「重いものは軽そうに、軽いものは重そうに」の心を忘れず、謙虚に、軽やかに、茶道の世界を歩んでいきたい。